

二次元ぷち文庫

# セレブ母娘 飼育日記

セレブオヤコシイクニツキ

冬野ひつじ  
表紙イラスト：成沢空

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『セレブ母娘飼育日記 前編』  
『セレブ母娘飼育日記 後編』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



セレブ母娘  
飼育日記

セレブオヤコシイクニッキ

冬野ひつじ

表紙／成沢空

## 登場人物紹介

### Characters

---

ふかほら なな  
**布花原 菜々**

聖ルクス学園 等部に通う少女。入学試験の成績の良さと品行方正さから委員長に指名されているも、転校生ということでまだクラスでは馴染めていない。

まりこ  
**布花原 茉莉子**

菜々の母親。単身赴任で海外に出ている夫・裕之の分まで菜々を愛そうと頑張る。短大時代にはミスコンで優勝したこともある、優美な容姿。

高級住宅地の外れ、鬱蒼うつそうと生い茂る雑木林の中に佇む朽ち果てた民家——人などいないはずのその暗い窓の向こうに、小さな灯りが二つ、三つ、チラチラと点滅している。

「……ねえ……やっぱり、帰らない……?」

「えーっ、ここまで来てそんな事言っちゃうのおー?」

薄暗がりの中、廃墟の廊下で押し殺した声で囁き合っているのは、身体を寄せ合い懐中電灯を持ったセーラー服の少女達だ。

「もしかして委員長つてば、すっかりしてるっばいけどさ……実は怖がり?」

そう言つて、茶色に染めた髪をツインテールにした少女は、唇を尖らせると手にした携帯電話をぶんぶんと振つてまくし立てる。

「もうッ、幽霊なんている訳ないから! ここで写メ撮っただけで学食券一ヶ月分だよ?」  
なのに怖いから帰るとかマジありえないし」

不満げに膨らませた頬は、ふっくらと丸みを帯びているが、それは他の少女達も同じだった。制服に包まれた身体は、大人になる前の少女特有の弾むような瑞々しきで満ち、プリーツスカートから伸びる若木のような脚の膝は、どれもツルンとした光沢を放っている。「そ、そうじゃなくて……いくら空き屋だからって、こんな風に他の人のお家に勝手に入るのは、良くないと思うの……」

『委員長』と呼ばれたのは、セミロングの小柄な少女だ。チューリップを模った銀色のへ

アピンがよく似合っている。口籠りながらも友人達を窘めるその顔は幼いながらも伶俐だが、暗がりでもはつきりと分かるほどに蒼褪め、半袖から覗いた華奢な腕は両脇の少女にがつしりと押さえられていた。

「あーあ、せつかく誘ってあげたのに委員長サマつてば、ノリ悪くてつまんなーい……」  
ツインテール少女のわざとらしいぼやきは、何かが割れるガシャーンという音にいきなり遮られた。

「今の、何ッ!?」「お、オバケ……!?!」

見合わせた六つの瞳は、一様に真ん丸く見開かれ、

「きやあぁッ! で、出たあぁ……ッ!!」

セミロングの少女を突き飛ばすようにして、幼い侵入者達は、けたたましい悲鳴を上げながら今来た通路を一目散に駆けて行く。

「待って! ねえ、置いてかないでっ!」

残された少女はといえば、よろけた弾みでささくれ立った床に両手をついて倒れ込んでしまっていた。

「美加ちゃん! 理沙子ちゃん……!」

後ろ姿に向かって必死に呼ぶが、懐中電灯の明かりはあつと言う間に小さくなり、後には静寂だけが広がった。

(……ひどい、自分達だけ逃げるなんて)

のろのろと立ち上がり、スカートの埃を手で払っていると、風邪を引いた訳でもないのに鼻の奥がツンと痺れた。

「痛っ……膝、擦り剥いちやった……」

鞆から出したハンカチで傷を押さえながら、少女はこの街に来てから味わう事になった何度目かの落胆に、深い溜息を吐く。

(やっとなんか仲良くなれたと思ったのに……やっぱりは、この街で仲間外れなんだ……)

セミロングの少女——布花原菜々は、小学校卒業と同時に、生まれ育った海沿いのマンションを離れ、郊外の一戸建てで母親の茉莉子と暮らし始めた。父親の裕之ゆうすけは大手都市銀行の役員だったが、突然の合併による人事異動で関連会社の海外支社長となり、建てたばかりの家で過ごす事もなく単身赴任生活をスタートさせている。

(前の街にいた時は、放課後は誰かの家でおしゃべりしたり、学校帰りにショッピングモールに行ったりして……楽しかったな)

この地域では一番の名門と言われている聖ルクス学園■等部に合格し、入学試験の成績の良さと品行方正さから委員長に指名されたものの、クラスメイト達のほとんどは小等部からの進学組のため、どこかよそよそしく、菜々は昼休みも放課後も、ほとんど一人で過

ごしていた。今日こうして町外れの心霊スポットを訪れたのは、生徒達の間で流行っている秘密のゲームの数合わせに、近所に住んでいると言う理由だけで呼び出されたようなものだった。

(でも、ママは庭の広い今のお家をとても気に入ってる……緑の多い街に住みたいっていつもパパに言ってたから、その夢が叶ったって、嬉しがってたもの)

少女は、初々しいが形の良い唇をキュッと噛む。

(今はパパがいないから……時々寂しそうだけど……)

木々の枝が鳴るたびに、藍色の輝きを帯びた髪がサラサラと微かな音を立てて揺れる。夏の夜風が運んできた土と草の匂いは、海辺育ちの少女の郷愁を却って掻き立てていた。

(でも……私が聖ルクスに合格した時も、それに、先生が委員長に選んで下さった時だって、泣いちゃうくらいに喜んでたっけ……だから、もしも私が、この街が好きじゃないだなんて言ったら……ママは絶対がっかりする)

見上げれば、ガラスの割れた窓の向こうは、すっかり陽が落ちて真っ暗になっていた。

「いけない、戻らなきゃ……!」

少女は床に転がったままの懐中電灯を手を取った。軋む廊下を出口に向かううちに、自然と小走りになる。その胸元のポケットに入っていたはずの生徒手帳がいつの間にか消えている事には気が付かぬままに――。



「ない……ここで落としたはずなのに……」

数時間後。菜々は再び訪れた廃墟の廊下を、一心不乱に手探りしていた。

（明日の朝のミサで使うのに……見つからなかったら、シスターに怒られる……！）

学園の教員の約半数を占める厳格なシスター達は、尊敬と同時に畏怖の対象でもある。彼女達によって毎朝行われる持ち物検査では、生徒手帳もチェックの対象だ。そもそも朝のホームルームで歌う讚美歌や、お祈りが全て載っている生徒手帳は、聖ルカスの生徒にとつては、筆箱や教科書と同じかもしくはそれ以上の必需品だった。

「どこにあるの？ お願い、出て来て……」

廃屋の闇は不気味な静けさにすっぽりと包まれている。自分の心臓の鼓動だけが、やけに大きく響いている。

（本当に、どこにもない……どうしよう）

心細さと、擦り剥いた膝頭のズキンズキンと脈打つ痛みが合わさって、這いつくばった少女の目尻に、涙が浮かんだ。

（どうしよう……）

『真面目で良い子』というのが、菜々に対する周囲の評価だ。だが、茉莉子と暮らし始める前は、呆れるほどに父親にべったりで泣き虫な性格だった。服や持ち物は全て見立てて

もらい、夏休みの宿題は始業式の前日に泣きながら手伝わってもらっていた。大人びていると褒められる表情や受け答えも、実のところは、大きな家にまだ年若い母と二人きりで残されたために芽生えた、自立心の現れに過ぎないのだった。

「うう……っ……ひっく……ッ」

我慢できずにとうとう大きくしゃくり上げてしまったその時、

「こんな所で何やってんだ」

真後ろで、ドスの効いた野太い声がした。

「きゃあっ!!」

セーラー服の襟をグシャツと掴まれて、少女の全身が竦む。

「肝試しか何だか知らんけどよ、勝手にヒトん家に入り込みやがって!」

「ご、ごめんなさい! ごめんなさい!!」

明らかに大人の人間の怒鳴り声だが、恐ろし過ぎて振り向く事もできない。菜々は頭を縮込ませて、必死に謝った。

「でも、違うんです……っ! 私はただ、あの、て……手帳を探していて……誰も住んでいないって思っていたから、それでっ、あの……あッ!!」

言い訳も虚しく、そのまま上半身をぐいと持ち上げられる。

「あぁン? 何だっ? ゴメンで済むなら警察いらねえよなぁ!!」

(け、警察……つて……!!?)

男の放った憎々しげな言葉に、少女の抱いていた幼い罪悪感は一瞬時に膨れ上がった。

(どうしよう……やっぱり、私、悪い事しちゃったんだ!)

これまでに浴びた事のない恐ろしい罵声と、犯罪者になつてしまふかもしれないという恐怖に、少女の小さな膝はひとりでガクガクと震え出していた。

(おまわりさんが来たら、私、このまま……タイホ……されちゃうのかな……!!?)

「ご、ごめんなさい……あの、本当にごめんなさい……」  
すると、

「おうアニキ、何の騒ぎだよ」

頭上で響いているのと同じ野卑な声が、今度は懐中電灯の明かりと共に前方からズンズンと近付いて来た。

「ああ、コウジか。ここ最近勝手に入り込んで荒らす悪ガキが増えたからな、とっ捕まえてやったんだぜ」

ランニングシャツを着た男達の顔は、三十代の後半のように見えるが、どちらも赤らみ不潔な印象だ。だが、伸び放題の髪が一人は金色で一人は茶色という以外は、全く同じ顔をしている。

(このおじさん達、双子……!!?)

「おいおい、こりゃ俺の大好物なロリガキじゃねえか……へへッ、やるじゃないのアニキ」  
へらへらと笑い合いながら、男達は怯える菜々の顔を覗き込んだ。

(うう……ッ、何だかすぐく、すっぱいニオイがする……)

少女は眼を射る白く眩い光に目をパチパチさせながら、鼻をつく臭気をなるべく吸い込むまいとする。

(これ、おじさん達のニオイ……!?)

濃厚な汗の臭いに垢の臭いが加わって、辺りに動物じみた熱気が満ちていた。整備された人工都市では目にする事すらかなかったホームレスという存在は、少女にとつて、まるで異次元のモンスターにも等しいものだった。

(こんなクサいの初めて……ううん、そんな失礼な事考えちゃダメ……)

「この前の女子高生も良かったけどよ、やっぱりオンナはションベン臭いのが一番よ」

黄色い無精髭に覆われた分厚い唇から、じゅるり、と涎を吸る汚らしい音が聞こえ、少女の細い項に鳥肌が立った。

「アニキには分からんだろうけど、初物の味はやっぱり違うよお……へへへ……」

犬のように息を荒げ始めた男の目が、充血しているのが見えて、菜々は咄嗟に視線を逸らす。

(このヒト達、怖い……!)

それは、生理的な恐怖と嫌悪だった。何か大事なものをこの男達に奪われてしまうという、切羽詰まった危機感で幼い唇が震える。

「あの、私っ、ここに来たのは今日が初めてで……だから……あの、許して下さい……」  
だが、圧倒的な脅威の前で少女にできるのは、消え入りそうな声で俯いたまま詫びる事しかなかった。

「……そうだなあ、お仕置きを受けるんだったら、許してやるし、警察も呼ばないよ」  
「本当ですか……!」

金髪男の言葉に一瞬安堵するが、自分の肢体に纏わり付くその視線がさつきよりも熱を帯びているのを本能的に感じ取って、セーラー服の少女は弱々しく問う。

「でも、お、お仕置きって……何を……?」

「へへっ、いいからこっちへ来なよ」

剛毛がびっしりと生えた太い腕が、小さな身体を土囊か何かのように担ぎ上げた。

「オジサン達のお部屋でちゃんとお仕置きを受けたら、帰してあげるからね」

「えっ……?!」

今ここから逃げなければ取り返しがつかない事になるという恐ろしい予感と、だが贖罪を拒む事は許されないといい良心の声が、菜々の中で葛藤する。

(どうしよう……どうしてこんな事になっちゃったんだろう……?)

「どうする？ しなくてもいいんだよ？ ただそうになると……分かるよね？」

剛毛の間からそそり立つ男性器の先端からは、何やらぬめった液のようなものが滲み出て、気味の悪さに拍車をかけている。普通だったら、絶対に触れる事も躊躇ためらうようなその代物に、少女はおずおずと手を伸ばした。

「うう、ごめんなさい……キス……します」

少女をこの時支配していたのは警察や知らない男達への恐怖だけではない。大人の言う事は聞かなければならないという、無意識に植え付けられた従順さが、結局は少女を、ひどくゆっくりではあるが男の脚元に跪ひざまずかせたのだった。

「キスって……こう、ですか……？」

何かの儀式を習うかのような緊張した面持ちで、肉棒に手を添え、男の顔を見上げる。どこか恭しい仕草は、男の加虐心を揺すぶる天性の媚態となっていたが、少女の頭を占めていたのは、この『お仕置き』を早く終わらせたいという一念のみだった。

「そうだ……両手でしっかり持って、まずは先っぽをペロで舐めろ」

「は……はい……」

言われた通りに顔を寄せると、嗅いだ事もないようなツンと来る異臭が、熱気と共に茂みの中から噴き出して来る。乾いた尿の激臭だった。

「ふぁ……ッ!!」

動きを止め、思わず目をつぶりかける。

(くさいッ！　こんなのお口に入れたら、絶対病気になっちゃう……！)

毎食後の手洗いと歯磨きは絶対欠かせない女子中等生にとって、生ゴミを口にするのと変わらない、もしくはそれ以上の不潔さだ。

「何だ、こんな汚いチンポはしゃぶりたくないです、つて顔だな……ん？」

「そんな……そんな事、ないです……」

少し苛立った声に危険を感じて、ぎこちなく一舐めしてみる。

(うッ、しょっぱい……！)

清らかな唇にこびり付いた牡の体液に、眉根を寄せ、微かに首を傾げる少女。

(海の水みたいなの……でも、もつと変な味がする……)

ぺろ……ぺろ……ぴちゃ……ッ……。

(う……うえ……ッ……臭過ぎて、吐いちゃいそう)

勝手に出て来る唾液になんとか助けられながら、菜々はチュパチュパと亀頭を吸い、時折上目遣いで男の様子を窺う。

「うッ……いいぞ……上手だ……ッ……」

やめさせてくれる気配は微塵もない。仕方なく少女は舌と唇でペニスを清め続ける。「ちよつとキツイかなあ？　しばらく風呂に入ってないんだ……キレイにしてくれや」

(そんな……私のお口は、うッ、お掃除道具なんかじゃ……ないのに)

反発は覚えても、少女は健気に清掃に励む。澄んだ唾液は、肉棒の怒りをなんとかして鎮めようと、滾々と湧いて汚濁を流そうとする。

んじゅッ、じゅるる……ッ、じゅぷッ!

(この出て来るしよっぱいの、飲みたくないけど……ンンッ、でも、飲まないと、息がで  
きないし……)

チュパ……チュパッ、ジュポッ……!

やがて、先端の三分の一の所まで行ったところで、被っている包皮に舌先が触れた。

(あれ? 硬い所と、柔らかい所がある……)

感触の違いに戸惑う少女。その拙い舌愛撫に張りを増した亀頭が、唇の間で存在感をムクムクと膨らませる。

「ああ、そのまま手で袋も揉んでくれよ……ハアッ、優しく……そう……」

陰毛の中から睾丸を探り出し、指の腹と掌を使って包むように揉む。揉むたびに男の先走りがピュッピュッと舌の根元に勢いよく叩き付けられる。

(なんか変……さつきより硬くて……う、嘘ッ!! 動いてる……?)

ペニスは、いつの間にか手で支えていなくても、しつかりと天井を向いている。それでも少女は恐る恐る奉仕を続ける。



「これ、どこまで大きくなるの……?」

「ハアッ、その調子だ……皮も、ンッ……ベロ使って全部剥くんだ……菌は絶対に立てんなよ……」

「んぷッ、はあ……ッ、はい……」

一旦口から出して、グイッと張った赤黒いエラの下に僅かに引つかかった包皮を、舌を使って押し下げる。

（何だか、ピクピクして……生きてるみたい）

極限まで充血した亀頭は、小さなエイリアンか何かのように、恐ろしげで醜怪な姿をしていた。

「剥いたか? じゃあ、それを呑み込め」

（呑み込むって……んぐッ! んん……ッ、うぶ……!?)

目を白黒させながら、それでもなんとかして男の命令通りにペニスを呑み込もうと、菜々は知らず知らずのうちに幼い裸体をうねらせるように上下させていた。

「息を止めるから苦しいんだ。鼻で息をして、ニオイをしつかり肺まで吸い込めよ……」

「くうッ……ンッ、ぐ……ふうン……!？」

グロテスク極まりない肉槍が、ついさつきまで穢れを知らなかった少女の口腔内を、咽喉を、ズルズルと貫通していく。粘つく液で汚していく。

(うぐ……ッ、咽喉ッ、詰まる……ッ!!)

じゅちゅ……う……ッ!

大きく開いた唇は、肉棒との摩擦で紅みを増し、端からタラタラと唾液の糸を垂らし始めた。

(ンぐ……ッ、く、息が苦しいよお……)

力なく下がった目尻からも絶え間なく涙が流れ、顎の先で唾液と混じって大きな雫となる。頭を上下するたびに、大粒の雫は剥き出しの腿にパタパタと落ちる。

「辛いか? これはお仕置きだからな……ッ、しつかり、反省……ンハアッ、してくれないと、これは、ンくうッ! そう! 教育的指導ッ、愛の鞭なんだッ……!」

言ってる事が支離滅裂な金髪ホームレスの息遣いが、ひととき大きく弾み始めた。

「ヒトの家に勝手に入るような悪いコは、ハアッ、チンポでお仕置きしてやる……ッ!」  
興奮のあまり口から唾を飛ばしながら、男は菜々の頭を両手で押さえると、腰をカクカクと激しく振り始めた。

「んんんー! んぶッ、んぐッ!」

じゅちゅ! ぬちゅ! じゅぶぶッ!

粘ついた水音が地下室中に鳴り響き、少女の意識が白く霞みかけた頃、

「ハアッ! 悪いコはオジサンの大事な子種汁……ッ、咽喉マ○コでッ……おらあ! し

っかりゴックンするんだあ……ッ!!」

感極まった叫び声と共に、肉槍がびゅくびゅくと痙攣しながら、少女の咽喉奥目がけて大量の白濁を放った。

「んぐう!? んんッ、むぶ……う……!!」

(お、お口の中にッ、なんか、熱いのいっぱい出てる……!?)  
びゅるッ! びゅるびゅるびゅるッ!

ただでさえ唾液とカウパー腺液で溢れ返っていた口腔内は、汚濁汁の直撃噴射を受けて決壊寸前だった。

「ぐぶ……ッ、ンぐッ! ふむうらん!!」

(でも、これ、全部飲まなきゃ……お家に帰れない……そんなのイヤ……!)

口では息はもう無理だった。辛うじてできている鼻呼吸も、排精中の激臭を鼻腔に押し込まれて、途切れ途切れになっている。

「ううッ、んぐ……んッ、じゅる……ッ」

精液に溺れそうになりながら、嗚咽を繰り返し、それでも健気に精液を飲み下す。

(が……がんばらなきゃ……! くうッ……キモチ悪い味だけど、あとちよつとッ、頑張る……がんばる……ッ!)

芝を刈った後のような青臭さと、それを上回るえぐみとしょっぱさが、少女の味覚をズ

（いけない……力が……どんどん抜けちゃう……）

「見えるか奥さん、アンタのおマ○コ、こんなに涎を垂らしてるぜ」

目の前に翳された男の指には、濃密な牝臭を放つ粘液が纏わり付いている。それを見せ付けるように舌で舐め取り、男は嘲笑った。

「ンッ、じゅる……ッ、貞淑そうなツラしてた割には、旦那以外の男ですっかり出来上がっちゃまってようだなあ……？」

「そんなんじゃないやありません……ッ！ 私は、娘の……ッ、菜々のために……！」

そこまで言って、人妻は全身を凍り付かせる。男が、作業着のズボンをおもむろに下ろし、ペニスを剥き出しにしたのだ。

「え……ッ!? 待って！ 待って下さい！ お話と違います……ッ!!」

「話と違う？ 何言ってるんだ奥さん、アンタが股広げて誘うから俺のイチモツが我慢できなくなっちゃったんだよ」

男はまるで口が裂けたかのように、大きく大きく囁う。

（どうしよう……この人、本当に私をレイプする気だわ！）

逃げなければいけないと頭では分かっているのに、茉莉子はM字開脚のまま、視線を肉棒から逸らす事ができなかった。

（コレがこの人の、オチンチン……）



文字通り幹のように節くれだった生殖器が、すぐ目の前に脈打ちながら屹立している。  
 (なんて下品でイヤらしいの……)

人妻を犯すという欲望でパンパンに膨れ上がったペニスが、目の前に隆々と突き出されている。その先からはもう獣欲の先走りが雫となつて滴り始めていた。

(すごい……もし……もしも……こんな逞しいモノで今突かれたら……)

忘れかけていた牝の本能が、眼前の肉凶器を欲しいと悶え始めていた。

「どうだ？ 欲しくて堪らんذارろ？」

子宮の奥の熱い疼きを悟られたのかと、内心焦りながらも、まだ未練がましく目はペニスを追つて、

(ああ、ダメよ！ 何を考へてるの……！ 私には裕之さんという愛する夫がいるんだから……！)

それでも、夫の面影を思い浮かべて、貞淑な妻は力一杯抗議する。

「レイプはッ……レイプだけはしないって、許して下さるって、おっしゃったじゃないですか……ッ！」

「違ふよ奥さん、これは和姦だよ……嘘だと言うなら、自分から愛液ダラダラ垂らしている所もバッチリ撮つてあるぜ」

帽子男の後ろで、金髪の中年男が得意気にピースをして見せる。

「ひッ、卑怯者ッ！ 人でなし……！」

生まれて初めてする他人への罵倒は、首筋に当てられたサバイバルナイフの冷たさに掻き消された。

「そうそう、アンタはこれからただの肉人形になるんだから、おしゃべりは控えてもらわないとな」

張り詰めた亀頭で唇をなぞられて、茉莉子は眉をひそめる。

（う……ッ、汚い……！！）

とろみのある先走りの汁が、赤みを増した唇をリップジェルのようにコーティングしていく。甘い芳香の代わりに、牡臭さが鼻腔に突き刺さる。

「イイ顔だ……男のチンポを欲しがっている自分の顔、よく覚えておけよ……」

外道そのものの口調で、帽子の男は力なく開かれた脚の間に腰を突き入れて来た。

「フッ、今からたっぷり旦那以外のチンポ味わわせてやるよ」

姫割れに食い込んでいたパンティーは、男の手で脱がされ、右の足首に辛うじて引っかかっているだけだ。

「あ……嫌あ……許して……」

小さく丸まった下着の頼りない感触に、美母は自分がこれから犯されるのだと思い知らされる。

「あなた……ッ！　お願い助けてッ！」

膾口にぬるりと熱い物を感じて、茉莉子は大きく息を呑んだ。

「いいかッ!?　これからアンタを本物のオンナにしてやるぜ！」

にゅぶ！　にゅぶぶぶぶッ！

「ああッ!？」

強張らせた四肢とは反対に、茉莉子の陰唇は大きく広げられ、夫以外の肉棒を歓迎するかのように深々と受け入れる。

（ああッ！　裕之さん、ごめんなさいッ！）

にゅぶぶッ！　じゅぶぶぶ……ッ！

「うほ……お、マ○コに吸い込まれるッ！」

陵辱者のその言葉は嘘ではなかった。孤こけい閨を守って来た人妻の膾は、久々の来訪者を歓迎し、肉褻を蠢かせ、愛蜜を塗しながら肉棒に献身的な奉仕を始めたのだ。

じゅぶッ！　じゅぶ！　じゅぶぶッ！

「ひう……ッ、動かさないでえ……」

「ハアアッ……アンタのマ○コが勝手に吸い付いてくるんだよッ、くうッ！」

挿入感が余程いいのか、男の吐息はすぐに荒くなる。

じゅッ！　じゅぶッ！　じゅぶぶッ！

(はあッ、裕之さん、普段はいつもゴム使ってたからあまり分からなかったけど……ッ、こんな風に乱暴に奥まで入れられたら……ッ、オチンチンの形が……はあ……ッ、イヤなの、中でハッキリ分かつちゃう……!)

男の息遣いと、茉莉子の息遣いが、少しずつ、重なり始めた。

(あッ、ああ……ッ、こんな、激しくされたら……ッ、ああダメッ！ これ以上考えちゃ、ダメ……ッ……!)

だが、粘性を増す淫らな水音は、女肉の歓喜を何よりも正直に訴えていた。

「んあ……ッ、はあッ、はあッ……ッ!」

「ほらほらッ！ もっと貪れよ！ 旦那以外の男のチンポ……ッ、いいだろ……ッ?!」

獣欲に任せた荒々しい腰使いだが、茉莉子の膺を隈なく探るようにして突き込みの方向を変え、深く浅く一定のリズムかと思えばふいに根元まで挿入される。その予測の付かない荒々しさに、牝肉は翻弄され、離すまいとしてより一層肉棒に吸い付いてしまうのだ。

(す、すごいッ！ 裕之さんとは、はあッ！全然違うわ……!)

子宮口まで届く勢いの怒張に、息もできない。鷲掴みにされた乳房に玉のような汗が浮く。しどけない唇から舌が覗く。

(ああッ、奥……ッ、子宮の入口まで、私ッ、犯されて……)

犯されている。なのに、身体はもっと欲しい、と行きずりのペニスを離そうとしない。



（ふぁッ！ 私ッ、こんな奥までされたコト……ない……ッ！）

「んッ、はぁぁ……ッ、はぁん！」

女肉の一番深い部分を息つく間もなく責められ、唇から漏れ出て来るのは、甘い啜り泣きだ。気が付けば男の動きに合わせて、腰を揺すっていた。

（こんなッ、ダメって分かつてるのに……ッ、はぁッ、腰が、止まらないッ！）  
 結合部からピチャピチャと飛び散る愛液の音にすら、背徳感を掻き立てられる。

「ああ、ああぁんッ！ はッ、はぁ……ッ！」

（汚れちゃうッ、せつかく裕之さんと選んだソファなのに、この男の汚らわしい汗と……私のイヤらしいお汁が、飛んでるッ！）

突かれるたびに増す黒い絶望と、同時に脳を溶かしていくピンク色をした淫らな充足感。二つの毒が、茉莉子の脳を惚けさせる。

「く……うッ、カリ首に髪が入り込んでッ、ザーメン欲しがってやがるッ！」

射精までの時間をまだ愉しみたいのか、男は力任せに乳首を摘み、ギューッと捻り上げた。「あう!? おっぱい捏ねちゃダメえ！」

押し広げられた身体が、電撃に撃たれたかのように大きく跳ねた。

「どうだ、見知らぬ男に犯されるのも、乙なもんだろッ!?」

「んぁッ、はう……うッ、これで、菜々にはッ、もう手を出さないって、や、約束……」

愛娘の名前を口にした時、ズキリと胸が痛んだ。

「うるさいッ！」

牝から母親の表情に戻りかけた女に苛立ったのか、男は突如腰を激しく突き入れる。

「いやあッ！ やめてえ……ッ！」

ブルンと乳房が揺れ、汗ばんだ身体同士がぶつかる甲高い破裂音がリビングに響いた。

「あぐうッ!？」

「元はと言えばアンタの娘が俺らの家に勝手に入り込んだんだッ！ それをこうして……ッ、警察に突き出されずに身体で償えるのをありがたいと思え！」

言っているうちに激昂してきたのか、男は口の端に泡を飛ばしながら茉莉子の子宮口をひたすらに責め苛む。

ズムッ！ ズムッ！ ズムズムズムウッ！

（あああッ、こんなにリズム良く突かれちゃ……ッ、気持ちイイの我慢できないッ！）

屈辱的な体位のままで、人妻は汗みずくの身体をビクビクと震わせ、無様な息継ぎを繰り返す。

「ンはあ！ ああ、ふあ……ッ！」

（いくものですか……ッ！ こんなッ、卑劣な男にレイプされて感じるなんて、はあッ、あ、ありえないわ……!）

快感の大波に揉まれるようにしながら、茉莉子の意識は男への強い嫌悪と、オーガズムの予感の間で滅茶苦茶に掻き乱される。

（裕之さん以外の男で、いくなんて……ッ、ああ、あッ、絶対に……そんなはしたない真似は……ッ！）

「おらッ！ このまま中出しされていつちまえよッ！」

腰を思い切りグラインドされて、花弁が肉幹の付け根に押し潰される。そのタイミングで膣肉に包まれた肉砲がズクズクと脈打つ。

「け、ケダモノッ！ 中はッ、中だけはやめ……はああッ!？」

間違う事のない射精の前触れに受精の恐怖が込み上げて、上擦った声が震える。

「ああ、そうだッ、俺らはケダモノだよ！ だがな奥さんッ、アンタはそのケダモノのチンポでイカされる肉人形なんだよッ！」

「ちが……ッ、私は肉人形なんかじゃ……！」

じゅちゅじゅちゅじゅちゅ……ッ！

言葉で追い詰められ、深々と最奥まで貫かれて、頭の中で何かが弾け飛んだ。

「ダメッ！ ダメよお願いもう許してッ！」

「ハアッ、ハアッ、今日のために一週間溜めたザーメンッ、奥さんのマ○コに全部出すぞッ……ッ！」

「ひうッ!? やめて! 菜々には見せないでえ……ッ!」

押し殺した叫びに、擦りガラスの向こうの影が止まった。

「……ママ? いるの?」

ドアのノブが、躊躇いがちに廻る。

「ダメ! 入っちゃダメよ!!」

茉莉子が叫んだのと、菜々がドアを開けたのは、ほぼ同時だった。

「……ママ?」

制服姿の菜々は、呆然と突っ立っている。

(見られた……こんな浅ましい姿を、菜々に見られてしまった……)

見開かれた眼に映っているであろう自分の姿のあまりの淫らさに、茉莉子はできる事ならこの場で舌を噛み切りたいとさえ思った。

「違うの菜々ちゃん……これは……!」

「……ほう、ママはすっかり立派な肉便器になったようだね」

少女の後ろに、金髪の男がスツと立つ。

「菜々ちゃんはどうかな?」

男が思わせぶりに言いながら、セーラー服の両肩に手を置くと、少女は遠目に見ても分かる程にたじろいだ。



「ほら……菜々はもう初体験を済ませました、つてママに報告しないとね」

「やめて、お願い……やめて……菜々には何もしないで下さい……！」

窓辺で男に後ろから抱き抱えられた母は、上気して髪は乱れ、汗まみれのエプロンが身体に張り付いていて、ついさつきまでペニスに責め苛まれていたという事が手に取るように分かる姿だった。

「菜々ちゃんのママはね、おじさんが菜々ちゃんのエッチな写真を学校や周りの人に見せるのをやめて欲しくて、おじさんとセックスしてるんだよ……いいママだねえ」

（そうなんだ……ママは私のために……おじさんとセックスしてるんだ……）

母の無残な姿に胸が痛いのに、どこかで倒錯した悦びめいた感情が生まれていた。

（やっぱり、ママは私の事、愛してくれてるんだ……私が嫌いだからお話してくれなくなつた訳じゃなかったんだ……！）

「菜々も、やめて……何してるの……！」

謔言のように繰り返す母の言葉が聞こえるが、男に促されてソファの前に立った菜々は、俯きながらセーラー服を脱ぎ、下着も脱ぎ去つた。金髪男はもうさっさと全裸になつてソファに腰を下ろしている。その股間には、隆々と勃起したペニスが天を向いている。

「ママ、ごめんさい……私、もうこのおじさんのオチンポに、バージンを捧げました」

「ああ……そんな……」

茉莉子が両手で口元を覆い、悲痛な泣きを漏らす。

「菜々は毎晩このおじさんと、それから、そこのおじさんとも、セックス……しています……」

菜々は男に背中を向け、赤黒い亀頭に自分の姫割れをあてがった。小さな手が、娼婦のような慣れた仕草で男性器を蜜壺の中に導き、そのままゆつくりと腰を落とす。

「んんッ、菜々のオマ○コも……ッ、はぁッ、おじさん達の肉便器として立派にッ……ンッ、し、仕込んでいただきました……!!」

ずぶ……ッ……ずぶ……ぬちゅ……!!

小さな身体が男の両腕の中に沈むにつれて、少女は甘い鼻声を漏らしていた。

「んはぁ……ッ、くうう……ン！」

驚きのあまり蒼白になった母の耳元で、茶髪の男が何かを囁いている。だが、目は見開かれたままで、何も聞こえていないように見えた。

(ごめんなさい……私のせいで、ママまでこんな目に……)

娘は肉棒に奉仕すべく上下に腰を動かし始める。その動作からぎこちなさは伺えない。

ぬちゅ！　ぬちゅぬちゅッ！

男はじつとしたままだ。少女だけが細い腰を振る。青筋の浮いた剛直を蜜壺の中に出し

入れする音だけが、いやにはつきりと響いた。

「そら、おねだりはどうした？」

促されて、少女は精一杯に媚びた笑顔で教えられた台詞を口にする。

「ご主人様ッ！ 今日も菜々のオマ○コで、はあッ、たくさんザーメンミルクを出して下さ……はあッ！」

言うと同時に、後ろから乳房を揉まれ、菜々の息はたちまち弾んだ。

「いいぞおッ！ ハアハアッ、今日はママの前でッ、オンナになったお披露目の種付けセックスだあ……ッ！」

じゅッ、じゅぶぬちゅッ！ じゅちゅッ！

ピストンに合わせて少女の小さな乳房がプリンプリンと縦に揺れる。母のそれと比べるとまだまだ小さいが、敏感さはしつかりと遺伝しているのか、ピンクの乳首はどちらもしっかりと勃起している。

（ああ……ッ、そうなんだ、この私のカラダ……ママと同じ、オンナにされちゃったんだ……）

ロストバージンの時の痛みはもう微塵も感じない。熟れる前の果実のようだった牝肉は、男の肉棒をすっぽりと包み込めるまでに柔らかく変わり、膣粘膜は厚みを増して吸精の術を知り尽くしていた。

(どうしよう、こんな……ッ、ママに見られてセックスしてるのに、気持ちイイ……！)  
 「んああ、ママっ！ 菜々は悪いコだから、はあッ、ああん！ おじさんの生オナホになつて、オチンポにご奉仕してるの……ッ！」

教えられた卑猥な言葉が、喘ぎと一緒に自然に零れ出る。

「私ッ、おじさん達のオチンチンでこんなエッチなコに生まれ変わったのお……！」

勉強と家事以外に覚えた、肉棒への奉仕という新しい特技。少女の秘められていた才能は淫らに花開いていた。

「そうだよッ、菜々ちゃんはおジサン達の肉奴隷になったんだッ！ アハハッ、これからママと一緒にこのお家でずーっと飼われるんだよッ！」

少女の妖しい昂揚感が伝わったのか、金髪男も大きく腰を振り立て始める。

じゅぶッ、じゅぶッ、じゅぶッ、じゅぶッ！

(あああッ！ 今日のおじさんのオチンチン、はあッ……何だか、いつもよりスゴイよお  
お！)

「あッ、イヤ……ッ!?」

茉莉子も、立ったまま後ろから抱えられて、ソファの前に運ばれる。

じゅにゅッ……!!

その場で再び犯され始め、現実を引き戻されたかのように悲鳴を上げる。



「あッ、娘が、娘が見ていますッ!!」

「いいから娘と一緒にイクんだよッ!」

ぬっちゅ、ぬっちゅ! ぶちゅちゅッ!

粘膜の擦れる音が、二組の男女の間からそれぞれの音程で聞こえている。

(あッ、ママのアソコ……ピラピラがはみ出てる……)

顔を上げればすぐそこに見える母の紅い秘部は、男のペニスを根元まで呑み込み、抽送のたびにのみ出た淫唇が、ねつとりと光りながら肉幹の付け根に纏わり付いている。

ぶちゅッ、じゅちゅちゅッ!

フェラチオをする時と同じくらいの水音を立てて男根をしゃぶる母のヴァギナを、少女は潤んだ目で見詰めた。

(すぐくエッチ……これが、ママの……オトナのオマ○コなの……!?)

花瓶に生けたまま数日が経った百合の花のような、濃厚で脳髓まで痺れるような牝臭が、少女の鼻腔を犯す。

「見えるか? コレがオトナのオマ○コだよッ……菜々ちゃんのロリマンも、毎日オチンポ啜えてたら、ハアハアッ、いずれはこうなっちゃうんだよお?」

「ひいいッ、娘にそんな事言わないでッ!」

母が悶えるのに合わせ、その股間で肉花卉が震える。それは確かに母の一部であるはず

なのに、まるで違う生き物のような、妖しい蠢き方だった。

（んはあッ！　こんなの、絶対おかしいのにッ、ダメなのにッ！）

愛する母の前で男との痴態を披露しているという異常事態に、少女の心臓はドクンドクンと早鐘を打つ。

（でもッ……ママの顔……泣きそうなのにッ、あンッ、キモチ良さそうで……見てるだけで私までッ、はあッ、どんどんエッチな気分になっちゃうッ！）

中年男達の性技巧を毎晩みっちりと教え込まれた幼い官能は、母の喘ぎに合わせていく。に、オーガズム目指して大きく波打ち、引き返せない性感の螺旋階段を駆け上がっていく。

（ああッ！　ダメなのにッ、セックス……ッ、気持ちイイよおお！）

「ママごめんなさいッ！　私、もう……！」

絶頂の予感がいつもより早く菜々の背筋を走った時、向かい合わせになった女達は、ほぼ同時に仰け反った。

「ひゃう!?」「はあ……ンッ!?」

そして、

ドクンッ！

男達の肉棒も、嬌声に應えて激しく脈打つ。

「はああンッ!?　ま、待つてッ、菜々の中に出すのはやめて下さいッ！」

しかし、男達が容赦などしてくれるはない。

「ああッ！ そんな……ッ、菜々には出さないでええッ！」

母の哀願の音が響く中、

ドクッ！ ドクドクッ！ びゆるるるッ！

獣達の肉棒は熱い精液をそれぞれの子宮目がけて迸らせていた。

「ふあッ、あッあッあッ！ ダメえ！ ママを見ないでえ……ッ！」

「ママッ！ ママあッ……ひああッ!？」

声にならない声で、互いに呼び合いながら、

「う……ッ、く……うう……ママあ……！」

美しい母娘は、同時絶頂という禁断の快感に脳髓まで溶かされながら、快樂地獄の底へと、また一つ、転げ落ちていく――。

ほの明るい深夜のリビング。

本来ならば温かな家族の団欒が繰り広げられているであろう場所には、紅茶の香りの代わりに噎せるような性臭が立ち込め、明るい笑い声の代わりに獣達の荒い息遣いが響いている。

「ンはあ……ッ、はああ……んッ！」

汗ばんだ男達の身体の下から漏れ聞こえる尾を引くような啜り泣きの声と、鼻に掛かった甘い喘ぎは、淫靡な調べのように、時に重なり合い、時にくつきりと分かれるが、止む事はない。女達の啼き声は、この家が完全に性獣達の巣窟となった証でもあるかのように、新居の隅々まで聞こえるのだった。

「ンハアッ！ 奥さんはオレとアニキのチンポ、どっちが好きかなあ？」

母娘と、吉永との夕食が済んだ頃を見計らって、双子の中年は合鍵を使って毎晩この家に上がり込むようになっていた。

「ああン、オマ○コのオチンポは、カリが広がっていて……ッ、オマ○コの中をゴリゴリ擦ってますうう……」

ズッ！ ズッ！ ズッ！ ズッ！

目隠しをした茉莉子は、双子に蜜壺と直腸に肉棒を突っ込まれ、床の上で破廉恥なサンドイツにされている。

「そうかそうかあッ、やっぱりオレのチンポの方が好きかッ!？」

「ああ、はいいッ！ でもッ、お尻をズコズコして下さっているタカシ様のオチンポもッ、お腹の奥まで届いて大好きですう！」

金髪男のペニスを括約筋で締めながら、茉莉子は媚びを振り撒く。

「はああッ、どっちのオチンポも選べない」

茉莉子と菜々は、吉永の許しが出るまで男達の性処理道具として肉穴を扱かれ、精液を子宮に注がれる。目隠しをして犯されても、もう誰のペニスか当てられるようにまで彼女達の蜜壺は舐けられていた。

「ああん、茉莉子はご主人様達の性奴隷ですッ！ オモチャです…ッ！ ですからッ、はあッ、茉莉子の肉穴ッ、お好きなようにお使い下さいッ!!」

テーブルの上には、湯呑の糸底が染み付いている。読まれないままの新聞はテレビの前に積まれ、床のニスは艶を失いかけている。庭に目をやれば、ささやかながら手入れのされていた花壇では、はびこった雑草に押し潰されるようにして弱々しい花が数輪咲いているだけだ。もはやこの家に、主婦はいない。いるのは二十四時間いつでも犯されるための、エプロンを着けた肉人形だけだ。

「ハアッ、それじゃ今夜も中にたっぷり出してあげるよ…奥さん、危険日なんだっけ？ そろそろ俺達の愛の結晶…アハハッ、できちゃうかな？」

茶髪男は、腰を打ち付ける強さを更に増す。

「どうせなら、ンハアッ、アニキのじゃなくてオレのザーメンで孕んでね…ッ！」  
金髪男も、負けじとアナルに差したペニスを出し入れする。

「ンひゃうッ！ そ、そんなッ、赤ちゃんなんて…ッ、ダメですッ！」

「どうした？ 肉奴隷の分際で、まさか孕みたくないなんて言うんじゃないよな？」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**